# After Rain

---

## 1

　放課後の校舎の一角。カーテンの引かれた狭い部屋の中に、荒い息遣いが響いていた。

「……あ、……」

　並んだデスクのひとつに腰掛けるようにして、若い教師が膝の上に乗せた少年の体を突き上げている。

「……先、生。俺、もう……行かないと」

「まだ、いいだろ。久しぶりなんだ。……ああ、やっぱりおまえが一番いいよ」

「……知りませんよ、奥さんにバレても」

　お互い、服は身につけたままだ。誰か人がきても、すぐにごまかしがきくように。

　教師は少年と繋がれたまま立ち上がり、少年を壁際に押し付けるような体勢で、腰をさらに動かし始める。少年が苦しげに眉根を寄せた。

「ん、……は、あ……」

「可愛いよ、その声」

　そんな言葉を耳元で囁かれ、茶化すなと言うように、少年が熱っぽい瞳で振り返る。ゾクゾクするほど、色っぽい映像だ。

教師は腰の律動をさらに速めた。少年は、壁に手を這わせ、教師の強いる行為に耐えている。

やがて少年の柔らかな肌の中で、教師は達した。満足げに最後の一滴までを少年の中に放ち、深々と突き刺していた自身を引き抜いて、服の中にしまいこむ。

乱れた制服を直しながら、少年は口づけてくる教師の唇を避けた。

「もう、いいでしょう。……俺、帰ります」

「ずいぶん、冷たいな。他に約束でもあるのか、桂？」

「俺はあんたの恋人じゃあない。妙な詮索はやめてくれませんか」

「わかってるよ。だが妬けるな。きみが、誰の体になら満足できるのか……」

教師の言葉に、少年はくすくすと笑うだけで答えを返さない。ベルトを止め終えると、教師の首筋に軽い口づけを残してドアロへと向かった。

◆　◆

人気のない放課後の廊下を歩いていた修史は、ふと眉をひそめた。

窓から差し込んだ夕焼けを踏んで歩く自分の靴音のほかに、何か物音が聞こえた気がした。

立ち止まった場所が、ちょうど数学科の準備室の前だ。物音というよりは、声をひそめて笑いあうような気配が、する。

「おいおい……」

半分呆れて、修史は一瞬どうしようか迷った。勢いよくドアを開けてやろうか、それともこのまま帰ろうか。

とその時、目の前のドアが唐突に横にスライドした。中からひょいっと顔を出したのが、予想どおりの相手だった。修史がドアの前に立っているのを見て、桂は驚いたように目を丸くする。

「あれ？　何やってんのおまえ。もしかして、俺のこと探してた？」

「もしかしなくても、そうだ。傘がないから送ってけって言ったの、おまえだろ」

「あー、そうだ。……悪い」

　桂が後ろ手に閉めたドアの向こうで、ネクタイを緩めた数学教師が煙草の煙をはいているのが見えた。ばか、と修史は握った拳で桂の頭をこつんと叩いた。

「学校ではやめろって言ったろ？」

「……仕っ方ないだろ、向こうが強引なんだからさ」

「自分に原因があるとは、思わないのか？」

「俺の体がオイシソーなのは、別に俺のせいじゃないね」

「あのなあ」

　修史には、桂の考えてることがわからない。別にゲイって訳じゃないはずなのに、言い寄って来る男が後をたたない。しかも、なぜかそれを拒まないのだ。弄んで楽しんでいるのだろうか……。

「いい加減、やめとけよ」

「どうだっていいだろ？　別に、減るもんでもないし」

「楽しいかよ、そんなことして」

「……別に」

　投げやりに言って、桂は学生鞄を担ぎ直した。昇降口で空を見上げて、クスッと小さく笑う。

「雨、やんじゃったね」

　修史は頷いて、いつの間にか晴れた夕焼けの空に目を細めた。